

巻頭言

ゆとりと無駄

生活科学研究科長 多治見 左近



必要は発明の母といわれますが、発明が必要の母、という見方もあります。今日の消費社会で、次々とあらわれる新商品を買求める自分自身の行動をみても確かに一面を言い当てています。

ライフスタイルの定説では、日本のライフスタイルはアメリカの消費生活の影響が大きいとされています。とくに高度経済成長期には豊かな生活にあこがれて、だれもが新しいものに飛びつきました。1980年頃からは個性や多様性などへのこだわりがあらわれました。

私は出身が田舎ということもあるのですが、例えば燃料は学齢期までは薪、その後練炭、石油となり、家庭用LPガスを使うようになったのはずいぶん後でした。かつて新しいものに飛びついた理由は、便利になるとか楽になるということがあったように思います。つまり生活必需品の範囲での新しいものという見方だったと思います。しかし最近の消費者行動は、ライフスタイルや価値観の変化が根底にあるのかもしれませんが。このような社会の雰囲気は、実体とかけ離れた、バーチャルな感覚をもつ人を一部に増やしているのではないかと危惧しています。

科学技術の発達が生社会と密接に関係していることは明らかです。社会発展に関する経済学の初歩的説明に、社会の持つ資源を日常生活に割り当てる場合と、研究開発などの投資に割り当てる場合とで、将来の発展に大きな差がでるという例があげられています。また数学者の藤原正彦先生は、数学は風光明媚な地域で発達した、といったことを指摘されています。いずれも、科学技術の発達にはある程度のゆとりや安定が必要ということを示唆しているようです。これは科学技術に限らず、文化についてもいえることかもしれません。

私は住宅需給構造を研究テーマにしています。学生時代に、大型計算機でデータ処理をするのですが、いろいろな分析を試みる結果、膨大な紙媒体の出力をだしていました。しかしその大半は役に立たず、ごく一部だけを使うということを繰り返していました。今のご時世では非難を浴びそうですが、私としては、無意味であることを確認できたという意味で役立った、対象に対する自分の理解を深めるという点では意味があったと正当化しています。

私は学術研究にはゆとりや「無駄」が不可欠だと思っています。しかし一方で私たちの感覚がバーチャルであった場合には本当の無駄になってしまうのではないかととも思います。ゆとりと現実的な感覚との緊張関係によって良質の学術研究が生まれるといえるのかも知れません。工作技術センターは、実体の器具を作製する機関です。実体に確固とした基礎をおいた研究の発達が必要と感じます。